

国語 (古文)

早稲田大学 法学部 1/4

<総括>

出題数

現代文2題・古文1題・漢文1題

試験時間

90分

例年通り、古文の学力を広範囲にわたって問う出題であった。

<本文分析>

大問番号	(一)
出典 (作者)	源通親『高倉院厳島御幸記』
頻出度合 ・的中等	稀。
分量 前年比較	分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加) 約1170字。昨年より約160字減。
難易 前年比較	難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
(一)	紀行	問一 問二 a c 問三 問四 問五 問六 問七	マーク マーク マーク マーク マーク マーク マーク	標準 やや易 標準 標準 標準 やや易 標準 やや難	文法(「べし」の意味)。 敬意の対象(謙譲語「奉ら」)。 敬意の対象(尊敬語「給ひ」)。 内容把握(「心ある」の意味を知っていることが必要)。 内容説明。 語の内容(「あやなく」)。 語句の空欄補充(和歌中の空欄にふさわしい語句を選ぶ)。 内容合致(合致しないものを選ぶ)。

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

古文の読解に必要な単語・文法・古文常識・和歌などをマスターし、文脈を正しく把握する力を養成しておくこと。

＜総括＞	出題数	現代文2題・古文1題・漢文1題	試験時間	90分
昨年度は問題文が2つであったが、今年度は1つの問題文が提示され、字数が大幅に増加した。 昨年度同様、5題構成であったが、昨年度がすべてマーク形式の出題であったのに対して、今年度は記述形式の問題が1題出題された。なお、設問箇所は、昨年度に続いて、すべて白文で出題された。 昨年度は漢字が旧字体であったが、今年度は新字体で出題された。				

＜本文分析＞

大問番号	(二)
出典 (作者)	沈徳潜『唐宋八大家文読本』より蘇轍「為兄軾下獄上書」
頻出度合 ・的中等	『唐宋八大家文読本』は頻出であるが、当該の文章は稀。
分量 前年比較	分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加) 339字。昨年より94字増。
難易 前年比較	難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

＜大問分析＞

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
(二)	嘆願書	問八	マーク	標準	意味の問題。どういうことについて「不測」と表現しているのか、文脈を考慮して捉える。
		問九	マーク	やや難	意味の問題。置き字「於」の用法とともに、「知」の目的語が「文字輕易、迹渉不遜」であることに留意して、傍線部全体の構造を正しく捉える。
		問十	記述	やや易	返り点の問題。譲歩の接続詞「雖」に注意する。設問指示に掲げられている意味を手がかりに、傍線部の構造を正しく捉える。
		問十一	マーク	易	読み方(書き下し文)の問題。再読文字「宜」(宜しく〜べし)、疑問詞「何以」(何を以て)に注意する。直前とのつながりから、傍線部が反語文であると判断する。
		問十二	マーク	標準	内容合致の問題(合致しないものを選ぶ)。それぞれの選択肢の内容と対応する箇所を本文中から探し、正誤を丁寧に判断する。

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

＜学習対策＞

漢文は独立した形式として出題される可能性が高いので、漢文の基本構造をしっかりと理解し、重要単語や基本句形、故事成語、漢詩の学習を怠らず、確実な読解力を養成すること。また、白文に対する十分な準備をしておくこと。書き下し文や現代語訳に合わせて白文に返り点を付ける問題もよく出題されるので、訓練を積んでおくこと。文学史、思想史も学んでおきたい。本文は、旧字体で出題されることもあるので、準備をしておくこと。
--

＜総括＞	出題数	現代文2題・古文1題・漢文1題	試験時間	90分
例年通り180字の記述問題が出題された。現代の社会や文化が直面する問題を扱う文章が出題される傾向や、空欄補充問題と傍線部説明の選択肢問題を中心にした設問形態も例年通りである。昨年度同様、脱落文補充問題が出題された。ただし、(四)は本文が非常に読み取りづらい上、正解の決まらない設問が多く、記述解答の方向性も見定め難い。受験生は大いに困惑したのではないか。				

＜本文分析＞

大問番号	(三)	(四)
出典 (作者)	森正人『誰が場所をつくるのかーポストヒューマニズム的試論』(新曜社2024年刊)第1部「場所を読み解く作法」4「場所の意味と感覚」の一節。	江川隆男『残酷と無能力』(月曜社2021年刊)1「死の系譜学(パンデミックー来るべき民衆)の傍らで」(本文前半がⅠ「死の倫理学」の一節、後半がⅡ「死の自然学」の一節。)
頻出度合 ・的中等	入試に出題されるのは稀な著者の文章である。	入試に出題されるのは稀な著者の文章である。
分量 前年比較	分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加) 約3200字。昨年より約400字減。	分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加) 約4200字。昨年より約200字増。
難易 前年比較	難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)	難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
(三)	文化論	問十三	記述	標準	漢字の書き取り。
		問十四	マーク	標準	脱落文補充。社会的な「場所感覚」の確立の事例が直前に示されたイに入る。ロがやや紛らわしい。
		問十五	マーク	標準	傍線部理由説明。ホは、「宗教」と「場所」との関わりを説明した、傍線部前後の内容に合致する。
		問十六	マーク	標準	空欄補充。空欄には「境界」が持つ「権力」の説明が入る。空欄直後の二文が〈内部を作り出す力〉であることに着目する。
		問十七	マーク	やや難	傍線部理由説明。傍線部を含む段落と次の段落に挙げられた複数の具体例に基づいて考える。ホが非常に紛らわしい。
		問十八	マーク	標準	空欄補充。空欄を含む段落の一文目「さまざまな地理的規模が入れ子状に重なっている」が手がかりになる。
		問十九	マーク	標準	傍線部内容説明。傍線部の「国家への帰属意識は…社会的に「想像」された」に対応するものを選ぶ。
		問二十	マーク	やや難	趣旨判定。ホが非常に紛らわしい。
		問二十一	マーク	難	傍線部内容説明。傍線部の「このように」が指す直前の内容を踏まえつつ、第一段落全体の内容に基づいて考える。
		問二十二	マーク	難	傍線部内容説明。第二段落末の内容を前提として、傍線部の方向性を考える。
(四)	哲学思想	問二十三	マーク	標準	傍線部内容説明。第四段落、とくに傍線部前後の文脈に着目して考える。
		問二十四	マーク	難	傍線部内容説明。傍線部直前の「これ」の指示内容を踏まえつつ、傍線部直後の内容に即して考える。
		問二十五	記述	難	傍線部を説明する記述問題 (180 字)。この本文の内容から解答の方向性を見定めることはかなり難しい。本文における「生と死についての考察」の内容を踏まえて、どのようなあり方が「予行練習」となりうるのかを考える。

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

- ・難しめの評論や随筆（特に現代の文化や社会の問題を扱った文章）の問題練習を通じて、本文全体の構造や趣旨を見きわめる力を養うこと。
- ・法学部の過去問に取り組んで傾向になじんでおくこと。
- ・100～180字の多様な記述問題（本文要約・傍線部説明・作文）に取り組んでおくこと。設問の条件に応じて柔軟に対処しうるだけの、高度な記述力が要求されている。